はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 13
発行：飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市双柳1-1　Tel(042)973-2111
第13号　平成30年3月31日発行　　平成18年3月31日創刊

今と昔の木の使い方を見てみよう！

●第13号の特集は「木材利用のいま・むかし」

飯能市は市域の約70%が森林という、緑が豊かなまちです。

現在、多くの森林はスギやヒノキが植林され、建築用材として育てられています。

江戸から見て西の方から運ばれてくるので「西川材」と呼ばれるようになった材木も、植林が行われる以前は雑木林として、建築用材だけでなく、薪や炭の材料として利用されてきました。

今号では、縄文時代や平安時代の人々が木材と関わってきた証拠である遺物や遺構から見る昔の木の利用と、植林し主に建築材として使用されるようになった森林についての歴史と現在の木の利用について特集します。

特集「木材利用のいま・むかし」 1

木の香・せせらぎの町

飯能市文化財保護審議委員会 委員
岡部 知子

私の住いは「名栗川」上流近くにあり、県道70号線が渓流を何度もクロスした山林と清流の小集落に暮らしています。家業が「材木店」ということもあり、私の朝は「木の香」で目覚め「せせらぎ」で就寝の人生だと思っています。育成した原木が製品となるまでの時間は私の一生より長く、人も森林も助け合いながら「共存」を絆に世代を重ねる構図に生かされていると考えますが、今日に至る自然変貌は大きくスローな毎日を生きていると思っている私の錯覚なのではと思ってしまうのです。随分と便利になった生活様式の分量だけこの自然環境は変化しています（しかも地球規模で…）。この現実は私自身も世間の誰もが知っていることであり、子供たちも学校で習い知っているのです。が、進む環境破壊に私たちは成す術もなく明日を生きようとしているのでしょうか…。

＊＊＊

木材の需要により飯能を含む近隣地区の繁栄は江戸時代からであったと記されています。江戸で起こった度重なる災害による民家の修復建造に必要な復興材としての需要が増えるにつれ「木材」の搬送効率を上げる必要があったのです。そのための重要な手段として「川」が利用されるようになり「名栗川（入間川）」から木材を江戸まで流送する「筏」が生まれました。

飯能河原上流での筏流し（再現）

渓谷を巧みにあやつる「筏師」は花形でした。秩父山地から比較的ゆるやかに下った丘陵地にある飯

能地域の山地には「杉」・「ヒノキ」だけでなく雑木林に多種の広葉樹が生育していました。しかし、江戸の中期になると需要があまりにも増え、危機感を先取りした山主たち（西川林業）は自然林の伐採を止め、計画的な植林による育成林へと移行したのです。植林と言っても先の長い話…。その間は間伐・枝打ち等、手間暇をかけて育成作業を続け、その間のしのぎとして薪炭生産での山林経営へと舵を切りこれが主産品となり定着したのです。この仕事は明治の中期まで続いていました。その後明治の後期からは「杉・ヒノキ」の苗木生産が活発化するにつれ「西川材」として順調に発展を遂げていったのですが、第2次世界大戦が勃発してから以降、戦火が増すごとに軍需品としての木材供出に追われることとなったのです。その膨大な量の供出はまさに乱伐状態で、山は枯渇してしまったのです。やがて終戦となり日本政府は住宅復興へと急進しました。しかし、政府の方針は戸建よりも木造集合住宅を優先させたのです。戦災を受ける前の宅地は分散していましたが、それを集合住宅型にすることにより居住を集約。その区画整理計画は戦後復興を考えた日本政府の都市構想であったと思うのです。戸建であろうと集合型であろうと「西川材」の需要は勢いを取り戻し、経済的にも安定したその頃すでに計画植林が実行されていたのです。日常誰もが目にしている山林風景、それは植林された当時の「杉・ヒノキ」が成育した「西川材」の豊かな自然環境の今現在なのです。

大正時代になると「木材」の搬送体系が大きく変わりました。武蔵野鉄道（現西武鉄道）の開通は、飯能の経済的効果、人々の日常生活をも変化させました。

山積みされた公用材木（飯能駅前）

駅の界隈には多くの「材木店」が集まり、多種多様な業種で賑わう「町」の繁栄がありました。花形「筏師」の時代にも「筏宿」で賑わいましたが「鉄道」開通による賑わいは別格でした。世情はまさに「大正ロマン」を背景に沸いていたのです。建築物についても「文明開化」の流れを汲んだ大正建築は今尚、各地に存在しています。デザイン上は「煉瓦」のイメージがありますが、洋風建築に影響を受けながらも「伝統日本建築」を基に有能な建築士の「材木」の使い方「和」の技術が支えていたのです。過去に相当数の「文化財指定日本家屋」・「町並み保存地区」を見学して来ました。専門知識に乏しい私は決まってその家屋の空気を感じるというか、世代を超え支え続けてきた「木と人間」の残り香に感動しています。そして伝統技術を残した「職人」の技術が美しいと感じる極上の時間に安堵しているのです。

立木の伐採は秋の半ば過ぎから始まります。昔（大正時代）は切り倒した木は輪組みと呼ばれる山の斜面に積み重ね、約1か月の乾燥後に修羅出しという方法で急坂を下るのですが、とても危険な作業であったため昭和30年代には消滅しました。

輪組み

修羅出し

現在ではユンボやクレーンなどの作業車両による搬出が主流となっていますが、その他架線と呼ばれるワイヤーロープ方式、まれにヘリコプターで移送するところもあります。下ろされた木材はトラックへと積み込まれ「市場」へ集荷されます。木材の取引は、山主が木材を「売りたい」という意向を示すか材木店が「買いたい」という意思をもって「木材市場」でセリを行います。購入した「材木店」は柱や板へ加工して製品化するのです。基本的にはこの関係で取引は成立していきますが、

「売り手」と「買い手」の関係は、世の中の取引と同様に複雑な面もあります。特に、近代においては「外国産材」流入による大問題については周知の通り。「シックハウス」問題についても現在進行形、すべて解決…とは言えない現状(これも周知)なのです。私たち「木」に関係する業者仲間は笑顔で耐えているのです。全国各地に納品されている「西川材」の品質評価その物が唯一の希望とも言えます。一級品の材木で知られる関西の産地からの「西川材」への信頼度は想像以上に高く、輸送経費をかけてでも依頼が来ています。長い冷え込みに耐える私たちにとっては感謝しながらジッと次のオーダーを待っているのです。

今日を考えるとき、私たち「おとな」は耐える…という戦いをしていますが、小・中学生のみなさん！どうぞ「山」を散策してください。「川」のせせらぎを聞いてください。

そして…いっぱい「自由な夢」を描いてください。

2

特集「木材利用のいま・むかし」

考古資料から見た木材の使用について

生涯学習課文化財専門調査員
片岸 絵梨花

1 **はじめに** 今も昔も自然豊かな飯能市では、太古の昔からずっとその自然を利用した生活を送っていました。木材の入手も容易(たやす)く様々な用途で、人々に使われてきました。

残念ながら飯能市では考古資料として木材が現在まで残っている例はありません。植物性の材料は大抵腐ってしまって残ることは稀だからです。しかし、木材そのものが残っていなくても、遺構や遺物から木材を使用していた痕跡をうかがうことは出来ます。これからいくつか紹介していきましょう。

2 **縄文時代の木材の使用**

1）狩猟に使われた木材

双柳地区にある山ノ内遺跡第３次調査では、楕円形の大きな土坑が写真１の様に並んで発見されました。土坑の特徴は２～３m程の長さで、土坑の断面を見るとV字型に深く掘り下げています。このような穴は、狩猟に使う落とし穴と考えられています。

1（山ノ内遺跡３次調査　赤枠：落とし穴）

さて、山ノ内遺跡の別の地点で見つかった落とし穴の底には、写真１の落とし穴とは違い小さな穴が２つ掘られていました（写真２）。当時、木の枝が立てられていたと考えられています。穴に落ちた動物の足を地面につかなくし、逃げ出すことが出来ないようにして、生きたまま捕らえるための仕掛けと想定されています。このように木そのものが残っていなくても遺構から木材が使用されていたことが分かります。

2（山ノ内遺跡で発見された落とし穴）

2）道具の一部に使われた木材

最初に述べたように、木材は時間がたつと腐ってしまうため、発掘調査で出土するのは土器や石などでできたものが中心になります。縄文時代の遺跡からは「石斧」と呼ばれる石器が非常に多く発見されます。

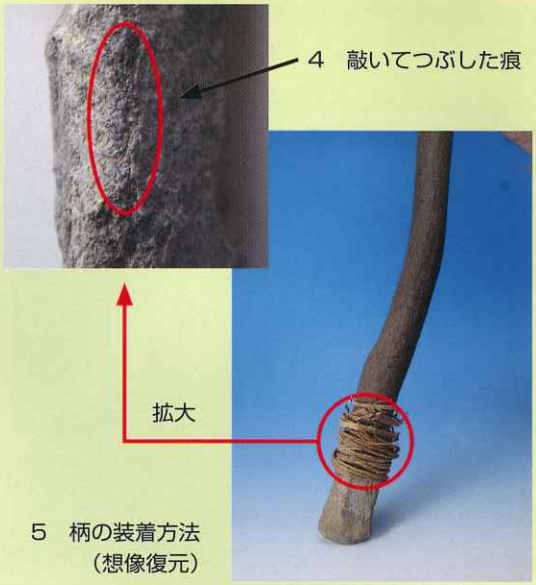
この石器がどのような使われ方をしていたか、飯能市で出土した石斧から観察していきたいと思います。

3（飯能市で出土した石斧　左：打製　右：磨製）

縄文時代には、打製石斧と磨製石斧、２種類の石斧があります。今回は写真３の左側にある打製石斧を取り上げてどのように木材が利用されていたのか観察してみましょう。

打製石斧とは、石を打ち割って斧のように形を整えた石器です。石を割った際できたするどい割れ口は刃として使われていたと考えられますが、写真4の様に側面の割れ口はわざと敲（たた）いてつぶしています。つぶして一部を窪めるように加工することで、柄と固定しやすいように工夫していました。柄は木材を使用し、縄でくくり付けて使用していたと考えることができます。（写真５）

「石斧」という名前がつけられていますが、使用方法は現代のスコップと同じで、土を掘るのに使用しました。



5　柄の装着方法
（想像復元）

③ 奈良・平安時代の木材の使用

張摩久保（はりまくぼ）遺跡は、奈良・平安時代の遺跡で、古代の人々が住んでいた住居跡や掘立柱（ほったてばしら）建物跡が見つかっています。

6（張摩久保遺跡　４次調査　一号掘立柱建物跡）

第４次調査からは、市内で最大級の掘立柱建物跡が発見され、古代の役所跡と考えられています。柱を据えるための穴を観察してみると、建物に使用された柱の跡が綺麗に残っています。

7（1号掘立柱建物跡の覆土）

写真7の黒い部分は柱の木がそのまま腐って埋まった痕跡です。この穴の痕跡から直径20～25cmくらいの木材（柱）を使用していたことがうかがえ、建築部材として木が多く使用されていたことが分かります。

また、丸太を加工する際に使う手斧ややりがんな等の現代の大工道具に通じる鉄製品も出土しています。

④ おわりに

今回は飯能市で発見された遺跡や遺物からわかる木材の使用例をいくつかあげて紹介してきました。昔から人々にとって木材は一番手に入りやすい材料だったのは一目瞭然です。

使用方法は様々で、道具の一部に木材を使用したり、張摩久保遺跡で発見された掘立柱建物のように柱などの建築資材として使用したり、またその他にも土器を焼く際の燃料材などにも使われていました。限られた資源のなかで上手く木材を使用し、大昔の人々にとって大事な生活資源だったことが分かります。